カナダ日系女性移住者の文化変容に関する文化人類学的研究－その2

山　田　千香子

はじめに

本論文は内容として既拙稿「日本人女性のカナダ移住への歴史的推移と傾向」(『長崎県立大学論集』第38巻第4号 pp133－151) に継続する方法をとっており，既拙稿を「カナダ日系女性移住者の文化変容に関する文化人類学的研究－その1：第1章」と位置づけ，本論はそれに継続して「第2章」,「第3章」とするものである。

第2章．カナダ女性移住者の個別事例研究

本論では1960年代以降，日本からカナダに自発的に移住し長期滞在する人々の増加という現象に注目し考察する。第1章で述べたように，とくに，移住者の多くを女性が占めていたことで，女性がどのような目的と認識を持って，カナダへの移住を選択していったのかという点を，筆者がおこなった聞き取り調査を用いて明らかにする。調査対象者は女性を中心としているが，比較考察の視点が必要であることから，女性だけではなく男性の事例についても紹介する。

調査はバンクーバーに移住した日本人女性を中心として，一人平均2時間前後の聞き取りを用いて行われた。結果として調査対象者は女性93名，男性26名の計119名である。年齢層は20代～80代におよぶ。調査方法は日

系団体代表者の方々を介して紹介を得てから，さらに個人的紹介を広げていくという方法をとった。質問内容の項目はおおよそ以下のとおりである。

＊質問項目：渡航年齢，当初の渡航理由，滞在年数，長期滞在に至った経緯，現在の思い等。

＊実施調査期間：平成13年7月28日～8月27日（32日間）
平成13年10月4日～10月9日（6日間）
平成14年8月6日～9月1日（27日間）
平成15年8月6日～9月14日（40日間）

本論では構成をライフヒストリー中心にしたため，紙幅の関係上インタビュー者の紹介を一部に止めた。他のインフォーマント事例については別の機会に紹介・考察したい。移住した時期を中心として時系列順序に紹介してある。

第1節.　事例研究

具体的個別事例に入る前に，重複する部分もあるがカナダの移民政策について簡単に触れておきたい。

カナダ移民政策の特色：カナダ移民のカテゴリーとして，1.家族移民：移民者の扶養家族。2．独立移民：カナダのポイントをもって入国できる人。3．ビジネス移民：投資のための資金を持っていれば，ポイントをもっていなくともカナダへくることができることから，必要資金を持っている者。以上があげられるが，3についてさらに説明を加えるならば，次のような方法になる。

＜投資で移住権を取得する方法＞

① 移民法で期待されている一定額を企業に投資したり，あるいは自分でビジネスを始めることができる者。

② 40万ドル投資して永住権を買う方法。

どちらかというと40万ドルを投資する方法に人気がある。資産が80万ド

ルありその内の40万ドルを投資すれば永住権が取得でき，さらに銀行の融資が出来て40万ドルの内10万ドルを掛け捨てにすれば，永住権が取得できるということになる。10万ドルの投資で家族全員の移住権が取得できることが魅力であり，さらに投資移民のように移住後事業を興す義務もないので移住後は好きなことができる点が特色となっている。

事例1　＜アメリカへの憧れから日本を出て35年＞

【M. Sさん】1962年日本からアメリカへ→1970年アメリカからカナダへ

＜海外に行きたい＞

日本を出てから風雪もう35年になります。戦後の回復がやっと軌道に乗り始めた東京オリンピックの3年前。1ドル365円・持参金は200ドルまで。米国に保証人がいないと旅行ビザがおりない時代でした。海外に行きたいという若い夢が小田実の「何でもみてやろう」を読んで発破がかかり，運良く米国友人の援けで，ニューヨーク国連本部ガイド志願書を手に入れた私は，父の猛反対に会うのも覚悟で，アルバイトでためた小銭と，姉からこっそり借りたお金で，サンフランシスコ行客船の一番安い切符を手に入れ，母たちと送りに来てくれるというTちゃんに，やぶれたストッキングを繕いに持っていって貰い，着物一式と，「アメリカには，なかかもね」とアンネをぎゅうぎゅう詰めたトランク2個をさげ横浜港を出港したのは1962年11月，小雨降る晩秋の午後でした。

＜アメリカへ＞

“赤い”中国からの避難民等約30人と1室に詰めこまれた船底14日の旅はどんな豪華な船旅にも勝る，胸を躍らせた旅で，船がサンフランシスコ金門橋の下を通り，朝露の中に白く光るアメリカが現れたときは，感極まった難民と共に，地面に膝まずき接吻したいほどでした。着いたアメリカは，米ソ冷戦のまだ真っ最中。南部諸州では，黒人の投票権・公立学校入学阻止で大きく揺れており，ヴェトナム戦争が泥沼化していきつつある時代でした。

今は万とある日本のレストランも，寿司屋は一軒あっただけ。まだステーキが主食であったアメリカ人を対象に，ロッキー青木[1]が開いた“紅花東京レストラン”のウエイトレスは，日本の基地より，ＧＩ[2]の奥さんになって海を渡った戦後の日本女性たち。大流行で，ライシャワー大使や小沢征爾の姿がしょっちゅう見かけられました。私は国連に働きながら夜ウエイトレスをしてましたけど，（それは）お金をためるため。

ここもまた，アルバイトで行った５番街ソニーの小さな事務所は，現会長である盛田さんが支店長時代。ショウウインドーに，栄養失調時代に育った私たちは見たこともないデブのアメリカ男性が，ベッドに寝そべり，その太鼓腹の上においた“ポンポン・テレビ”とソニーが名づけたちっぽけな小型テレビを見ている大きな写真が飾ってあって，行き通るアメリカ人が珍しそうに見ていました。日本では，腰かけられる水洗便所なんてなかった時代ですから，デパートで足の見えるトイレに入り隣の女性の足が，私と反対方向に向いているのに気づいたときも，「何ば，しよらすやろか」[3]と不可思議に思ったくらい，日本とアメリカはまだ遠かったようです。

＜国連ガイドとして＞

佐世保という小さな街から，一直線にニューヨークにやってきて，この世界一強烈な街で青春時代を過ごして，変化が起きないと言う方が不自然でしょう。“一人旅をすると五感が目覚める”と言った友人がいますが，国連で世界41カ国から37の言葉を話し，また一堂に会すると開花したような百人の若く美しい女性と働き，暮らし，夢と恋を語って共に成長する内に，民族間の違いよりも共通性の方がもっと大きいと意識づけられるようになったのもこの頃です。地下鉄に乗ると隅っこで，おびえるように席を取っていた黒人たちが，黒人運動の影響で，新しい自意識を取り戻して急速に変化していき，女性解放運動で，女性たちが門戸が閉ざされていた分野を開拓しはじめたのもこの頃でした。数多くの植民地が独立して世界地図を変え，国内ではヴェトナム戦争悪化で，徴兵拒否をする友人たちと，

ニューヨークでワシントンでとデモに参加。ケネディ，キング牧師，チャーチル，ネールの死と内外変動で揺れるこの時代に，ニューヨークでボーイフレンドの死にあった私は，ニューヨークを去ることにしました。

＜カナダ，バンクーバーへ＞

1970年晩秋，バンクーバーに着きまた零からの出発。住んで働くには移民権。移民権をとるにはまず仕事が必要ということで一番最初にとびこんだハーツレンタカー。面接で運転出来ないのに出来ますと嘘をついて雇用書を貰い，移民局に戻ってまだぐずぐず言う移民官を説き伏せて移民権のハンコを貰い，１ヶ月後に始まる仕事のためドライビングの猛練習。入社１日前にドライビングテストパス。私は昔から一夜漬けが上手かった。出社した１日目のダウンタウン・ハーツ事務所で「飛行場まで車を持っていって下さい」と言われ内心仰天。相手も今日が免許証受領第１日目とはよもや知りません。しかも運転しろと言われた車がフォードの大型車で，股下の短い日本人にはブレーキに足が届かないようにつくられたシロモノで，バッグや着てる物皆脱いで背中に当てて，やっとこさ足がとどき，坂を上るときは，前がハンドルの間からやっと見えるという“恐怖のドライブ”とはこの時のことを言うのでしょう。

バンクーバーは今では世界的規模に発展した環境団体，壱岐のイルカ殺しの折りには，佐世保のあたりにもお見えした“グリーンピース”発祥の地ですが，70年代は，反核・反ヴェトナム・反捕鯨そしてそういったイデオロギーはあっても，カネとは縁のない，また住むところのないような人たちがコミューンと呼ぶ共同生活をしていました。好奇心はあってもいつもお金のない私も，その一つに約20人くらいと暮らしていました。大晦日の夜が来ても，皆お金がないから豆のスープだけ。その時ばかりは，今頃佐世保のＫ高の友人たちは，おせち料理をたらふく食べ，四ヶ町の辺りを騒いでいるに違いない。ああそれなのに私は，戦後大豆カスを嫌というほど食べさせられて大嫌いになったその豆科のスープしか正月の晩に食べられないんだと思うと，さすがに涙が出，自分の部屋にかくれて泣きました。

＜山での仕事＞

そんなコミューンの連中がある夏，バンクーバー島の採鉱会社に仕事を見つけてきました。開発途上国のように林業・漁業・鉱山等の第一次産業が中心産業であるＢＣ州では，夏山で仕事をする人が沢山おります。一緒に住んでいたスーザンという女性が，珍しく採用され，では私もと応募したところ，山の経験がないからだめ。だけどキャンプ・クックならといわれ，「料理お手の物です」とまた嘘を言って就職。船とトラックとヘリコプターで山の奥に連れてこられテントをはり，朝の５時からコックさん。朝ごはんに，卵とステーキを食べる肉食人種の弁当をこしらえ，汗と泥にまみれて帰ってくる炭坑夫に夕食。

１ヶ月後，キャンプ移動でコックはいらぬが，採鉱夫の仕事をするなら連れて行くわと言われ，思量度の浅い私は簡単に承諾。コンパスを持って前に谷があろうが藪があろうが，ただ一直線に進み，要所にオレンジ色のビニール・テープを木につけ，土壌サンプルを集めてリュックにつめ，日中に歩きまわる仕事です。「烏帽子岳のごたっとやろ」と思って引き受けたのが大間違い。湿帯性森林と呼ばれるカナダの山がいかに深いかは，つい最近も，家の裏山で50年前に墜落した小型飛行機が，偶然発見されたり，今夏は家の玄関を開けると黒熊がニューっと立っていたり，バンクーバー市中心からくるまで20分もかからぬところで，こういうようですから，バンクーバー島の山奥ともなると熊のみならず，クーガーと呼ばれるライオンの雌みたいな姿をした山獣がわんさいて，その熊やクーガーに襲われ食べられる人が毎年いるのですから。

それまでマンハッタンと国連本部をハイヒールでしか歩いたことのない女が，子どもの靴屋で買った21半の運動靴をはき，深い森や谷を，クーガーの頭上奇襲を恐れて，大声で「ここはお国の何百里，離れて遠き満州の！」と歌いながら歩き廻り，かさかさと音がすれば，鹿の足音。ポキポキするのは熊。黒富士型の熊のウンチがほかほかしているときは，すぐ近くにいること。そういうときは一目散に逃げ木に登ったこともありました。さら

に肝を冷やしたのはある日一緒に仕事をしていたスーザンが崖から落ちて肋骨を折り救援隊を待って，真っ暗な森林の中を一刻一刻と二人で過ごし，翌朝カナダ空軍ヘリコプターで救出されるという事件でした。

＜日系人コミュニティでの活動＞

山からこりごり下りてきた私は街の仕事を探すことに決めました。そんな時，偶然に，大学で比較文学の講師をしているスイス人のリタというおもしろい女性に出会い，カナダは移民の国だけど，ここ英語圏では，英語を話せない人たちは非常に苦労しているに違いない。そういう人たちを援助する機関を設立しようではありませんかという彼女に同意。当時カナダ政府が雇用計画の一環として提供していた補助金を受領して日系人のみならず，中国・ギリシャ・イタリア等八カ国の移民を対象に福祉機関を設立。戦前日本人が内陸に強制移動させられるまで，リトル東京と呼ばれる日系人の中心街であった地区の路地に，小さなオフィスを8人のスタッフで借りました。スキッド・ロー（どや場）と呼ばれるこの地域は一人暮らしの老人たちやアル中の人たちが古いホテルに一人住まいをしており，新しい事務所の入り口表示のため黄色い電信柱に目をやると，立小便をしているオッサンたちがよく見かけられました。

だけどそんなオフィスもオープンすると日系人のおばあさんおじいさん，また若い移民たちがしょっ中入ってくるようになりました。「政府から来た書類訳してください」「お医者さんに連れて行ってください」「熊本の親戚に手紙を書いてください」いろんな書類の翻訳，一人暮らしの老人の見舞い，インフォメーション，家族や離婚のカウンセリング，そして裁判所，警察，移民局，弁護士のオフィスでの通訳と，走り廻る毎日になりました。

私たちのようなコミュニティ活動をおこなっている人たちのため，無料の講演をしていた弁護士団体の一人であった，現在の主人にあったのもその頃でした。この福祉機関はその後もう一つの福祉機関と合体し，「モザイク」と呼ばれる現在バンクーバー最大の移民福祉機関として発展してい

ます。

<一世の歴史に感動>

接触した沢山の日系人の中で特に感動したのは，一世たちの険しい移民の物語であり，そこに私は若い頃ケープタウンに仕事を求めていった父の姿を見，石のように耐えてきた女性に母の姿を見るような気がしました。彼らの辛苦の体験を日系人のみならず一般のカナダ人にも知らすべきだと考えた私は1975年，二世・三世の数人に呼びかけ，彼らのストーリーと写真を集め，カナダ移民第1号である長崎県出身永野万蔵来加百年目を記念して，全国で計画されている日系カナダ移民百年祭に歴史写真展を企画しようではありませんかと提案したのです。長い間ジャップと呼ばれ偏見と差別社会の中，目立たぬよう，白人社会に同化しようとして生きた彼らははじめは消極的でした。だけど提案に同意し，人をもっと集めて委員会を設立し動き出すと，自分たちのルーツに目覚め，新しいエネルギーが再生されプロジェクトは驚くようなスピードで進んでいきました。私もカナダ各地を廻りインタビューまた写真を集め，170の写真パネルとテキストを伴った“日系カナダ百年史写真展”が完成。大きな反響を呼んでカナダ全国，日本では読売新聞社の後援で各地を巡回しました。

自分が無意識でまいた小さな種は，その後もどんどん大きくなり，同じ写真プロジェクトに参加した若い人たちから日系コミュニティの新しいリーダーが輩出。“隣組日系人センター”が設立され，戦中の強制移動で廃止されていたリトル東京地区の“日本人祭”が恒例の祭りとして復活。同級生のYちゃん（現在F紋一郎先生）にも頼んできて貰い踊って頂いたこともあります。

そして1988年には，同じ写真展のメンバーをリーダーとした“日系カナダ人補償委員会”が，戦中の日系人財産没収と国の政策に対する補償を求めて数年の交渉の結果，協約書にサイン。金銭的個人補償の他，国会においてカナダ首相が“戦中カナダ政府が日系人対象にとった政策は誤りであり，人種差別に基づいたそのような不祥事が二度と起こらぬ事を誓う”と

いう，それは歴史の一段落を見るものでした。

＜三か国のたくさんの友人＞

日本に帰ると母から「あんたは，いつまで仕事ばせんばとね。カナダの旦那さんはお金ば，やらっさんとね」(4) と言われます。日本へ帰るお金を稼ぐためと始めた日本陶器工芸の店も，既に17年になってしまいました。日本を出て35年，一時はフランスの詩人ポール・ベルレールの詩のように“げに我は　うらぶれて　ここかしこ　さだめなく　とび散らう　落葉かな”と感じたこともありました。その落葉も主人と大学生の息子と一応落ち着き，日本・ニューヨーク・バンクーバーの間を毎年行き来しています。

三つの国で沢山の友人たちを持てた私は，本当に幸せだったと思います。もしパタッと死んだら，この三つの郷里，バンクーバー・ニューヨーク，そして佐世保の九十九島に私の灰をまいて貰えたらと考えているのは，まだ皆に甘えている証拠かも知れません。

＜本人へのインタビュー（01年８月25日）と高校同窓会機関紙掲載文から＞

事例２　＜家族での移住＞

【Ａ・Ｔ氏】1968年日本からカナダへ

兄（1941年生まれ）は67年に移民。そして兄がスポンサーとして残りの家族（母，私，妹）は68年に移民。ですから家族全員で移民したので一般の日本からの移民と多少環境，状況が異なると思います。母の姉もその娘も移民して来ています。移民してきた当時はみんな若かったのですが，，，，全員，どんどん歳を取ってしまいました。約34年間カナダで生活をしてきたことになります。

父は銀行関係の仕事に携わって来ましたので，ちょくちょく海外に出張とか転勤をしていました。その関係で父から海外の話を時々聞かされていました。父の仕事上，３年ごとに引越しをした経験があり家族で日本からカナダに引っ越すという軽い感覚でした。ただ私が中２の時に今で言う過

労死で53歳の時に亡くなりました。その当時，母子家庭の子供は就職する際すごく不利な状況にありました。34～5年前の時代の生活環境，様式，情報はまるで今の日本と比べ物にならないほど相違があります。ですから換算レートは１米ドルは360円の時代。ジャンボジェットもないのでアンカレッジ経由でバンクーバーに到着。その当時，兄は残業に次ぐ残業でとうとう円形脱毛症になり，がりがりに痩せていました。（兄は日本のサラリーマンになることを嫌っていました。）

丁度，その頃カナダで技術移民を募集し始めたばかりでした。兄貴と兄貴の友達二人でカナダに最初に移民して，生活が楽なようであれば私，妹，そして母の３人も行こうということで相談が決まりました。兄が67年に移民。そして残りの３人は68年に移民。私が20歳の時でした。ですから日本の教育は高校まで受けています。

そしてＳＦＵ[5]を73年に卒業（数学科）しました。（高校での英語や国語は最低でした！！！）仕事を転々と変えました。現在行っている仕事はファイナンシャルアドバイザーです。兄は今年から退職です。

＜カナダでの生活様式について＞

＊なぜ34年間もずっとバンクーバーで生活をするようになったか？？

(1)　自然が豊富。山あり，海あり，そして空気がうまいこと。しかも水道の水が井戸水のようにうまかったこと。最近は少しカルキの匂いがするけどまだまだ日本に比べ臭くない。

(2)　日本人好みの食べ物が手に入ること。「国宝ローズ」[6]は昔の日本のお米の味と同等。魚も肉も豊富で安いこと。最近の日本のお米の味は改良に次ぐ改良で国宝ローズとはまるで違うけど，，，。（イクラにしても）商社がイクラを買い付ける以前はただ同然の値段でした。

(3)　公共料金が安いこと。電話，電気，水道代など。

(4)　医療費が安いこと。医療システムがかなり違いますが，健康保険制度が整っていて薬代はもちろん診察料も無料に近い金額。しかも入院費用もびっくりするほど安い。

(5) 公共施設がかなり整っていること。コミュニティーセンターがいたるところにあり，そこにはプールやジム（体育館）もあります。そして図書館も多い。いたるところに公園があり，パブリックゴルフコースのグリーンフィー（料金）がめちゃ安いこと。スキーも安かった。

(6) 日本にあってバンクーバーにないもの。バー，キャバレー類の娯楽施設。もちろんパチンコもない。ネオンサインが好きな人にはむいていないかも知れません。

(7) 一般のサラリーマンは週休二日制で残業がないこと。週末はのんびりと生活を楽しめること。日本で家族や友達を呼んでＢＢＱ（バーベキュー）パーティをしますか？？？

カナダでは会社と私生活は油と水の関係です。

＜教育について＞

カナダに来てびっくりしたことはまずカナダ人は体格が良いし，力もあるのでとても体力的にはかなわないと判断して勉強する道を選びました。その頃はまだまだ技術（どの分野においても）を学ぶと言う環境ではありませんでした。労働賃金はものすごく高いのでわざわざ技術を学ぶようような雰囲気はありませでした。大学に入学するにはカナダの高校をある程度の成績で卒業した人。またはグレード13（大学程度の勉強）を受講して政府の試験にパスした人。（今ではこのグレード13程度の勉強はコミュニティカレッジで受けられます。）

このグレード13で化学，物理，数学，歴史（近代カナダの歴史）を取りました。何しろ英語はサッパリ判らず，授業中先生の説明が全く判らない状態。例えば先生が口頭で質問を言うので生徒はそれをまずノートに筆記してから質問を解くような状況でした。ただ先生が金魚が口を開けてパクパクしているように見えるばかりで，全く何も聞き取ることが出来ませんでした。日本である程度英会話を勉強しましたが，喋る早さといい音色も人により全く違うし，私が言うことはサッパリ判ってもらえず（発音が悪い！！！）というような状況でした。バーバルコミュニケーションが出来

ない状態でした。しかも私の高校での成績は最低。特に英語，国語，古文は下の下。ラッキーなことは日本の高校の教育程度が高いのでカナダでの勉強の内容は理解出来る範囲でした。だから家に帰れば教科書を何度も何度も繰り返して読み，本の内容を理解していくようにしました。多分カナダ人の理解する時間の3～4倍は掛かりました。

日本の大学受験のように夜中まで勉強をしました。単語も覚えないといけないし，スペルも覚えないといけないし，文章書きも正確にしないといけないし,,，もう一つラッキーなことは誰も私の高校での成績では大学に入学することは無理だから辞めろというようなアドバイスをしてくれる人がいなかったことです。誰も知らなかった。誰でも大学に入学出来ると思っていましたから。（雑音には耳を貸さないほうがよろしいですね）1年後政府の試験で物理，化学そして数学をパス！！！

ＳＦＵを選んだ理由は英語が必須でないことです。現在ではいろいろ英語能力テストを受けないといけないでしょうが,,,，　大学では数学を専攻。大学には69年に入学そして72年には卒業。めちゃ勉強させられました。そして学費は私が夏休みのバイトとかで補いました。親には一切面倒を掛けませんでした。日本の大学生は青春を謳歌するために大学に行くように見えますね。（日本の大学生の精神年齢は低い！！）

日本の高校を出ただけでカナダの大学を卒業出来た人は1～2人しかいないと思います。しかもカナダで大学を卒業した人はカナダ人口の10％程度。

＜英語について＞

カナダに来た当時はテレビで漫画を見ていました。新聞では4こま漫画を読みました。そして広告を読みました。漫画は子供向けなので単語というか言葉が簡単。そして文章は短いけれど表現は北米方法で日本人の考え方や表現方法と違います。そのような簡単な文章を覚えていきました。（日本から）カナダに移民して来た人はほとんど勉強していないように感じますが,,,，テレビでのコマーシャルは人にアピールしないといけない

ので綺麗な発音でしかも判りやすい言葉で説明するので役に立ちました。ただテレビでコメディー番組を見ていてもサッパリ冗談が判らないこと。

北米で活躍中の政治家，スポーツ選手そしてタレントなどについて揶揄しても誰も知らないので判らないし，冗談の表現方法が日本人感覚にはぴんと来ないこと。周りの人が笑っているのにつまらない顔をしていることは本当に情けないです。最近では電子メールでいろいろ友達からジョークを受け取りますが，99%は理解できるので愉快です。何しろジョークが大好きですので,,，今でも英語には苦労しています。発音はどうしても治すことが出来ないし，ボキャブラリーは少ない。最近では居直って私の英語が判らない様な人はアスホール！！！と叫んでいます。考え方がまるで違います。両刀使いが大変です。　　(03年8月16・25日)

事例3　＜残業と満員電車の生活からの脱出・・・＞

【G・T氏】1969年，UBCアジア図書館日本司書として33年（1969～2002）

出身：滋賀県彦根市。1962年慶応大学文学部図書館情報学科卒業。明電舎の研究所7年勤務。池田政権下の所得倍増政策で猛烈に働かされた時代。残業と満員電車の通勤に「疲れたんでしょう。自分の時間も持てなかったし」と，たまたまカナダ大使館が載せた移民募集の新聞広告を見て，カナダ行きを決意した。多くのカナダ帰りの二世の学友から聞かされていたカナダの広大さや自然の美しさも，移住決定の潜在的要因の一つであったようだ。1969年に現職（図書館司書）をえる。2005年に完全退職予定。とくに日系移民歴史資料の完全英訳が自分のプロジェクトの一つとなっている。　　(01年7月30日)

事例4　＜旅行でカナダへ来たことから・・・＞

【T・Sさん】1972年に旅行で訪れたのが契機。現在：日系新聞社社長。

バンクーバーは出身地の高知に似た感じがして気に入った。横浜からノ

ルウェーの貨物船に乗り，アメリカまわりでカナダへ。乗客は12人くらいのなかに，日本人は一人だけ。その後日本語教師をして，1年後にはカナダ人と結婚するはめになってしまった。2人子どもが誕生し，下の子が3歳のとき離婚を迎える。以前から新聞社の仕事に関心があり，1年後の1978年，バンクーバー新報創刊。戦後30年を経て地元で発行される日本語の新聞がなかったバンクーバーにおいてガリ版刷りで新聞を創刊した。

はじめは，港の管制塔に電話して日本の船の寄港を調べ，波止場へ停泊する貨物船に船舶通信をもらいに行っていた。1年後日本のタイプライターが手に入り，その後さらに大きいタイプライターが入り，タブロイド版になった。初めはおもしろそうなニュースを掲載し，日本の商店にただで置いてもらっていた。1年51週，毎週毎週出していったが大変なことだった。500部くらいから出発した。その後の日系社会の活性化を反映して今日では広告も増え紙面も増えて，ページ数も52～56ページをコンスタントに出せる新聞に成長した。1986年を境として広告の申し込みが増えた。1987年には企業家の会「企友会」も発足しており，日系社会に活性化が感じられた。

この仕事の基本は「即，判断すること」だと思う。どれとどれはできるが，どれができないと。ひとつひとつのことを出来る限り誠実に対応していくこと。日系コミュニティのニーズを捉えることは大事だが，あまり媚びに走ってはいけないと思う。　（01年8月9日）

事例5　＜日本の女性の立場として居心地がいい＞

【T・Tさん】1973年，トロントへ。20代は銀行で働きニュージーランドへ海外派遣の経験有り。A大使館で働いていたが，トロントの会社から引き抜きされ，大使館を7年で退職。1973年，日本採用トップ補佐としてトロントに新しい事務所をオープンさせる。ニューヨーク，東京へニュースを送る仕事を続け1983年までその仕事をする。ところが日本の会社が閉鎖となる。カナダでバンクーバーを見てから帰国しようと立ち寄ったところ，

トロントと全く違う自然環境に驚き，遊んで行きたいと滞在を延期する。自然の美しさと人情味を感じ，ここで仕事を持ちたいと代表的日系会社に申し込む。その月に採用が決まる。しかし，これまで日本採用として働いてきただけに，現在，日本採用と現地採用のギャップを味わっている。

カナダは日本の女性の立場として居心地がいいと思う。散歩していても見ず知らずの人が声を交わす。人に対するヒューマニティがあると思う。人間の価値が認められていると感じられる。何と言っても日本では得られない体験を与えられていること。いろんな民族の人たちと日常的に接し，いろんなことの発見は私の人生にかけがえのないものとなっている。

（03年8月26日）

事例6　＜男性の出世は早く，女性は平社員・・・＞

【N・Tさん】1976年エキスポのとき就労ビザで。

福岡にある船会社の代理店に勤務していた。博多の古い船会社。男性の出世は早く先輩女性はみな平社員だった。残業も多く毎日遅かった。朝7時15分に会社に入り掃除を済ませ8時半はじまり。書類の整理が業務。上下関係には抵抗なかった。天下りの会社警備員の人に「ここは長くいるところではないよ」と。その時から，カナダについて知らなかったが，見たことのないところへ行きたいと思うようになっていた。長年やっていた合気道を続けられるところがいいと考えた。「武道インストラクター」としてカナダへ移民申請。27歳の時だった。

道場では日本人はたった一人。就労ビザでできる仕事は合気道だけ。5～6年たった頃，好きな合気道でも嫌いになっている自分に気づいた。日本に帰ろうと決心したとき，生徒で入ってきた日系三世の夫と出会う。12年前に結婚。40歳で長男誕生。子どもを生んでわかったこと。今まで負けず嫌いで競争心も強く，男性に生まれたかったと何度も思った。20代でカナダへやってきて，こちらではトップ。天狗になりやすかった。わがままやってきたと思う。カナダという国はまわりの目を意識せずに，自分の判

断で考えて育児生活ができる。圧迫感がない。小さなことにくよくよしないで自分らしさを素直にだしていけば楽になれる。これからの目標は合気道をできるだけ多くの女性に広めたい。　（03年8月26日）

事例7　＜高校での交換留学が契機＞

【H・Gさん】1977年の交換留学をきっかけとして。

現在：カウンセラー，サービスワーカーとして働く。

1977年，ロータリークラブの交換留学生として1年間カナダの高校に留学。日本人の留学生などはほとんどいない時代だった。すっかりカナダの生活に溶け込み，「お金を貯めたら必ず戻ってくる」という思いで日本へ帰国。帰国後，航空会社のグランド・ホステスの職につき，3年でその職を辞し再びカナダの地を踏んだ。1980年。バンクーバーで結婚し，ツアー・コンダクターの仕事に就き，仕事で旅行者を案内しカナダ中をまわった。カナダの生活が10年過ぎた頃，今の暮らしへの意欲がなくなり離婚。その後ドイツへ渡り10年生活をする。

カウンセリングへの関心とその仕事への意欲からカナダへ戻り，昼はツアー・コンダクターの仕事，夜はカウンセリングの学校で勉強し無事学校を卒業した。犯罪被害者支援組織でボランティアを開始する。この仕事を通じてバンクーバーの慈善活動組織から本採用となり，言語・心理的サポートや事務的サポートを担当している。カナダのよさは「型にはまらない生き方ができるところ」であり，個人の生き方が尊重される風土は，たとえあるグループでうまくやれなかったとしても，常に別の可能性がある。

（01年10月5日）

事例8　＜日本では使い捨ての女子社員・・・＞

【A・Mさん】1980年に「2年位で帰ってくる」つもりで出発。

今，一番自分らしく生きていると思う。

＜カナダ移住に至るまで＞

日本で就職した最初の会社は，事務系でした。その会社は，かなり大きく，福祉設備などとても整っていて贅沢なぐらいでしたが，事務職の女子社員の地位はとても低いものに見えました。たとえば，入社間もないころ，勤続20年の有能な先輩が，私と同期入社の大卒の男子社員に「おばさん，これ，コピーしておいて」と言われて，怒りをぐっとこらえて「はい」と返事をしているのを見て愕然としました。たとえ，20年頑張っても，こういう扱いを受けるなんて。自分にはとても我慢できそうにないと思いました。

入社後1年足らずで退職して，なにか技術を身につけようと製図の専門学校に通い，卒業後，今度は技術職として中堅の電気系の会社に入社しました。そこでは設計の仕事を任され，やりがいはありましたが，いつまでたっても女子社員待遇に変わりはありませんでした。この会社には，年配のアメリカ人の顧問がいて，週に一度，希望者に英会話を教えてくれていました。英語が好きだった私は，クラスの世話係りになり，先生とも親しくなり，なにかにつけ，アメリカの話をいろいろしてもらいました。その影響でしょうか，いつのまにか，たとえ旅行でもいいから，日本の外へ出てみたいという気持ちが膨らんでいました。そのうち貯金もたまってきたので，待遇が他の女子社員と同じなら，同じように2週間の長期休暇をもらえるだろうから，憧れの海外旅行をしたいと，上司に申し出たのですが，設計担当なのでそんな長期休暇は困るという返事でした。これでは，当分海外には行けないなと落ち込んでいたときに，銀行が置いていったらしい便利帳のようなものを自営業の父の事務所でみつけ，そこに海外移住の申し込みの仕方が書いてあるのを見つけました。カナダに移住可能な職種に製図士があったので，半信半疑で申し込んでみました。(1979年末)

意外なことに4ヶ月でビザがおり，展開のあまりの速さに自分でも怖くなってしまったけれど，「ええい，ままよ！」と，とにかく行ってみることにしました。このときは2年ぐらいで帰ってくるつもりでしたので，両親には「いってきまーす。」と言って出てきました。

＜カナダ移住，そして結婚＞

1980年7月，バンクーバーに到着して一週間ぐらいしたころに，「新移住者の会」のパーティがあり，そこで横浜出身の主人と知り合い，3ヵ月後に結婚を決め，両家の親を驚かせました。

その後，英語学校に通いましたがすぐに知人の紹介で設計事務所に勤めました。一年ほど勤めた後，長女を妊娠して退職し，出産間際まで，また，英語学校に通いました。長女出産後，いったいどなたが手配して下さったのか分からないのですが，ボランティアの方から連絡があり，個人レッスンやグループレッスンで英語の学習を続けることが出来ました。育児に専念していたのは長女が生まれてから次女が生まれて一年ぐらいまでです。それ以外は，パートながらなにか仕事をしていました。年子で次女を出産して1年ほどしてから，バンクーバーのナイトスクールで日本語教師を募集していたので応募し，クラスをひとつ教えることになりました。初めての教師の仕事だったので，先輩の先生にいろいろ教えていただき，週末にはその先生の自宅で開いている日本語教室の低学年のクラスも教えることになりました。

ナイトスクールのほうは少し慣れてから，バーナビー市のナイトスクールにも日本語クラスを新設してもらい，そこでも教えました。何年か続けるうちに，主人の残業が増え，娘たちのベビーシッターを見つけるのに苦労するようになりました。いよいよ今度ばかりは見つかりそうもないという時に丁度，日本語を教えたいという方が二人いらしたので，ナイトスクールの仕事を代わってもらうことにしました。このころには，次女も小学1年になっており，昼間は自由な時間が持てるようになったので，日本食レストランのランチタイムのウェイトレスの仕事に応募しました。

＜歯科技工士の学校へ＞

ウェイトレスとして働いている間に，歯科技工の学校に入ろうと思いつきました。歯科技工の学校は，学科の書類選考と，実技試験で入学を許可されます。書類選考の対象となる高校理系の科目は日本の高校では文系だったのでとっておらず，ひとつずつ通信教育で取りました。この勉強は，高校時代の勉強より数倍楽しかったです。通信教育は歯科技工の学校の受験資格を取るためでした。

娘たちが4年生，5年生になったころ，私も通信教育での学科も取り終え，そろそろ受験をしようと思っていたところ，急に娘たちをフレンチ・イマージョンに入れることになり，自宅から離れたところにある学校だったので送り迎えが必要なので，次女が7年生を終えるまで自分の受験は待つことにしました。次女が7年生になった秋，早速受験の申し込みをしました。実技テストは年明けで，驚いたことに10倍の倍率でした。半年も結果通知を待たされ，ほとんどあきらめていたころに合格の通知が来ました。けれど，その通知には当分コースは休校になることが書かれていました。結局，合格通知から2年待たされやっと入学できました。

この間，ウェイトレスをなんと9年間もやっていたことになります。でも，この9年間は，同僚に恵まれた上，仕事がパートタイムだったので，子供たちに十分時間をかけてやれ，日本語学校のほか，習い事をいろいろさせてやることも出来たので，惜しいとは思っていません。

＜現在の仕事と歯科技工士＞

歯科技工学校の卒業間もなく勤め始めた現在の職場も4年目に入りました。最初の一年は補助的な仕事でしたが，現在は実際に義歯を作る仕事をさせてもらっています。現在，肩書きはアシスタントでも，私は実際に義歯を作る仕事（日本で歯科技工士がしている仕事）をしています。資格を取るには，歯科技工の学校を卒業し，資格試験に合格しなくてはなりません。資格試験は費用が1000ドルほどかかります。しかも，実技試験は，学校卒業後，実務経験を数年積まなくては合格がむずかしいようなかなり高

度な技術を要求されます。（日本の場合，学校卒業と同時に資格試験を受け，90％の人が合格できるそうで，試験の内容もかなり基礎的なもののようです）。そして，資格を保持するためには年間500ドルの登録費を払い，２年間で30時間の講習を受けなくてはなりません。歯科技工士として開業するには技工士の資格が要ります。けれど，雇用される側として，資格を持っていてもそれほどメリットはありません。給与は腕次第で，資格のあるなしには関係ありません。就職状況も，資格より腕が優先されます。雇う側としては，資格保持者一人に対してアシスタントを３人まで雇えますから，資格保持者がある程度いればいいわけで，余分には要りません。アシスタントは登録費が年間250ドルで，講習受講の規則もありません。こんなわけで，資格保持者の中には資格を放棄してアシスタントに戻ってしまう人もいます。

＜日本との違い＞

日本では歯科技工の仕事は資格保持者のみに限られていますが，ここでは，歯科技工の仕事をしている人の半分以上がアシスタントという肩書きです。つまり，雇う側がアシスタントとして登録さえすれば，誰でも雇用人として歯科技工の仕事が出来るのです。同じ仕事をしていても，資格を持っている人とアシスタントの人といるわけです。なかには資格保持者より技術的に優れているアシスタントもいます。私も，付き合いでなんとなく受けた筆記に合格はしたものの，実技を受けるには特別なトレーニングをしなくてはなりません。これには会社にも協力を願い出なくてはなりませんし，私自身もかなりの時間と労力とお金をかけなくてはなりません。はたして，そこまでして資格を取る必要があるのか，今，考えているところです。

一人前になるには10年近くもかかる職種ですが，この仕事を選んでよかったと思っています。毎日の生活の上でも，子供たちにとっても，そして職業に関しても，カナダに来て本当によかったと思っています。今年のクリスマスは一番よかったね，と毎年言えること。何か自分の得意なものが

あれば胸張って生きていけるし，今，一番自分らしく生きていると思えます。　(03年8月26日)

事例9　＜旅行業の仕事の関係で＞1982年一家3人で移住。

【T・A氏】旅行会社社長。東京出身。1982年一家3人でカナダへ移り住む。日本旅行のカナダ社勤務。11年間。カナダ営業部長。副社長。社長。1997年1年間でもっとも優れた日本のツアー企画として「ツアー・オブ・ザ・イヤー」のグランプリを受賞する。(五大陸・専用機で行く世界一周の旅：カナダ社のボーイング757型機を一ヶ月間チャーターし，バンクーバー出発，世界11カ国を巡る豪華版旅行)。1975年の台湾への歯の治療ツアーを企画しヒットする。

＜移住のきっかけ＞

東京まで1時間の通勤電車生活で身体を痛める。日本の旅行業界で18年間仕事をし，日本から外国への案内をしてきた。発想を変えて，外国へ住んで日本客を受け入れするのもいいのではないかと考えた。年齢40を迎えて人生の転機として，海の向こうから日本を見つめなおしたいと・・・・。コンサルタント会社を起こす。今まで旅行会社にいてできなかったことをこれからは幅広くやっていきたい。

日本では食べ物，人的サービスがいい。お客を大切にする。カナダの国は生活水準も高いし，自然派には向くでしょう。但し，人的サービスの品質が悪い。自己主張が多くて，お客を大切にする意識が低い。カナダは家も道路も公園も街も何もかも生活空間が広い。日本はどんなに逆立ちしても叶わない。世界中旅行してみても，定着して生活しないとわからない。人間性の解放，自由な時間を自分なりに使えるという意味では，カナダのオフィスワーカーは極めて幸せだと思う。　(03年9月4日)

事例10　＜カナダで高校の教員として働く。女でも経済力をつけなければいけないと育てられてきた＞

【Ｓ・さん】1986年にワーキング・ホリデービザでカナダへやってきた。

日本ではＹＭＣＡに就職し日本語学校の配属だった。日本語教師になるには経験を積むことが大事なので，インドネシア，マレーシア，台湾と配属された。カナダへきたのは24歳のとき。ワーキング・ホリデービザでやってきた。カナダは自然がきれいで人はやさしい・・・。仕事の可能性を信じて履歴書持って日系企業をまわった。社長秘書としての２ヶ月の仕事をもらう。数ヶ月単位の仕事の繰り返しでは移民になれない。カナダにいて政府からのサービスを得ようとすれば，居住権を得て国民にならないと，とてもつらいことがわかった。ところが，移民許可に時間がかかり，何ヶ月たっても音沙汰なし。個人が問い合わせしてもだめ。待つ間，不安感でいっぱいだった。お金も地位もなく人の親切が身にしみた時期だった。

1989年に移民決定。カナダはアピールの国，あきらめず言い続けることが大事だと思う。そこを何とか，と食い下がること。教員の免許は州の管轄なので，大学の教員コースへ申し込み単位取得をめざした。働きながらＵＢＣ(7)，ＳＦＵへ通った。教員免許の前に仕事が来た。じつに，いろんなところで雇ってもらった。校長先生とのインタビューの時に，移民のなかで教員枠に空きがあると教えられ応募。バンクーバーの交換プログラム教員として，バーナビーの３校に派遣される。こちらの高校の様子がわかり良い経験となった。次の年はＵＢＣのプログラムで教えることになり，スタートした。独自の教材を，毎日毎日コピーし，明日はどうしようと悩みながら１年乗り切った。夏はアメリカ政府が関係するハワイ大学研修に参加し，その後はその教科書を使用した。

カナダという今の場所が好き。仕事に忙殺されない生活で，自分の仕事が終われば，すぐに終えていい仕事体制。夏は給料はないが２ヶ月の休みがある。今年からＭＡコースをとる予定。カナダ在住14年。

（03年８月29日）

事例11　＜学生ビザでカナダへ＞

【N・Yさん】1989年に学生ビザでカナダへ。アメリカで学びたかったが父の知り合いがカナダにいたので，バンクーバーにやってきた。英語を勉強しカナダの高卒資格をとってカレッジへ入学する。1993年の終わりまで在学し卒業した。来た当初は半年間地面に足がついていないような感覚だった。

大学では政治学の勉強をしたかったが担当の先生が「英語にハンディがある人はすぐやめてください」と言われ自信がなかったのであきらめた。それからストレスを抱えてしまう。授業に緊張し，英語への不安，自分への不安。厳しいのではないかと思った。高校卒の学歴だったのでせめて卒業したい，卒業してやる，という思い。「やるしかない・・・」。数学とか外国語とか入りやすいものから入った。政治学や歴史などは後回しにした。卒業を迎えたときの達成感。ただ，だれにも祝って貰えなくて寂しかった印象が残っている。

旅行会社の仕事につき3年間働く。学生ビザから就労ビザへ申請し，移民申請がすぐできた。旅行会社の仕事は自分のしたいことでなかったので，やめて学校へ戻った。貿易の学校へ入り人材派遣へ登録し，アルバイトを1年経験する。希望を「貿易」としぼり，会社リストをつくり60～100の会社を1件1件まわって履歴書をおいていく。会社の人事との面接にこぎつけ，入社にいたった。今は輸出入荷物の国際運送会社で5年目にはいります。数百人の会社で，毎日いろんなことがおこるおもしろみがある仕事。物であったり国関係のことであったり，ひとつひとつ，どうすればいいのか勉強すること。それへの達成感がある。来て良かったと思う。甘やかされて育ったので，もしこのまま日本にいたら考え方が違っていたと思う。

（03年8月23日）

事例12　＜日本でイギリス人の夫と知り合い結婚－その後カナダへ＞

【Y・Hさん】1994年にカナダへ。香港→アメリカそしてカナダへ

小さい頃より日本美術に情熱を燃やす両親の影響を受けながら，アーティストが多く出入りする環境で育った。その後，エレクトーン奏者として世界各国を演奏旅行したが，その過程で知り合ったH氏は世界的に知られた日本美術の収集家だった。結婚したYさんは夫の収集のため，日本国中の展覧会やアーティストのアトリエを共に訪れ，交渉にもあたった。その後，夫は香港で日系企業とジョイントベンチャーを設立したが，夫婦二人の夢を追って香港でギャラリー経営を始めた。

当時香港では中国人以外が経営するギャラリーは珍しかったため，期待を持っていた。ギャラリー経営は初めてだったものの，バブルの最盛期にあり，日本をはじめ世界各国の企業および金融機関も多く進出していたことから，良い顧客をつかんでいくことができた。しかしその後，1997年の中国返還の年を迎えるにあたり，法律改正によるビジネスへの影響や経済の下降を懸念し，香港を離れることを決意。アメリカという大国にチャレンジする希望があり，カリフォルニアに移住することにした。

カリフォルニアでは，日本や香港時代に築いたコネクションを使い，ディーラーとして，売買を行っていた。確かにアメリカの市場は巨大だったが，ギャラリーを持つことによる，経費やリスクも大きいためギャラリーを開いていくことは考えず，ホールセールとして成功することを目指した。カリフォルニアには合計4年住んだが，その間法律の改正が行われ，企業移民が永住権を取得していくのがさらに困難な状況になっていき，医療も安心して受けられる保証がないといった理由などから，自分たちを国民として受け入れてくれ，安心感を覚えるカナダへ移住することを決心した。

北米ではギャラリーを開くことを考えていなかったわけだが，アーティストや知人友人の応援があり，またカナダにはビジネスを起こすのに好都合な条件が数多くあったために，再度ギャラリーを経営する決心をした。カナダはアメリカと比較して，会社の設立費用が安い。また，バンクーバー

は地理的な面でも，アメリカとの国境も近く，太平洋を臨み日本やアジア諸国にも一番近い都市でもあることから，マーケットの拡張が行いやすいという利点がある。さらに観光都市でもあるバンクーバーにはさまざまな国の人が訪れるため，こうした旅行客相手のビジネスチャンスもある。

（01年8月16日）

事例13　＜看護師3年・・ワーホリでカナダへ＞

【K・Mさん】1998年ワーキング・ホリデービザでカナダへ。

東京で看護師として3年間働く。日本にいると看護師の仕事は先まで見えてしまう気がした。何かを探したかった。自然が気に入ってカナダを選び，1年間チャレンジしようと思った。最初の2ヶ月は言葉も思うようでなくとてもつらかった。老人をお世話するボランティアをはじめる。リハビリのお世話をしているときに，こちらで看護師をやってみたいと思った。神戸震災のとき看護学校卒業したばかりでボランティアにいった。「人間ってすごいな」とその時思った。あの時の感じたことを大事にしたい。母も姉も同じ職業。①英語の勉強，②看護の勉強を目標にカナダで資格を取り，ターミナルケアに関わった仕事をしていきたい。自分の人生を頑張ろうと思う。

（02年8月17日）

事例14　＜子どもの留学から＞

【H・Cさん】1998年，娘からの呼び寄せ移民として

カナダは漠然とながら憧れを抱いていて，ずっと「来たい」と思っていた国だった。55歳で退職し娘からの呼び寄せ移民としてカナダへやってきた。長女が高校の語学研修でカナダにホームスティをする。その後，長女はUBCに留学。その間，日本とカナダを何度も往復したことで，ホテル滞在よりはアパートを購入した方が安いと考え，長女が留学中にアパートを購入する。長女がカナダ人と結婚し出産。航空会社で働いているため，ベビーシッターを幾たびか雇ったが，どのベビーシッターにも不安があっ

た。娘の夫の母も仕事をもち忙しいので，自分がカナダで孫のめんどうをみようと決心した。これまで，良いと思ったことは行動している。幸い今まで大きなことで後悔するような失敗したことはない。できるだけ人生を楽しみたいと思う。　（02年8月8日）

第3章　女性移住者の特色

本章では，第2章で紹介した事例を参考としながら「女性の移民・移住」という移動について考えてみたい。国際連合の1990年の統計によると，世界の移民の半数を今日は女性が占めている。国際移動の過程は出身社会，そして受け入れ側社会のジェンダー秩序によって多かれ少なかれ規定されている。だれが出移民し，だれが残留するのか。その規定要因にはかならずジェンダー規範がかかわっている。地域的に格差があるが，成人後間もない結婚が規範的でない社会では，独身女性はより豊かな生活や刺激を求め移動する。また，既婚女性は短期間により効率よく稼ぐストラテジーとして，労働市場に参入する。背景には全体的な家父長制の衰退が挙げられるが，女性の社会的役割は大きな変遷を遂げているのである。また，「家族合流」の枠内で移住する家族の一員として，配偶者や扶養者としての女性移住者も増えている(8)。

海外へ移住する人々に対して発せられる一般的な問いは「なぜ海外へ？」あるいは「どうしてカナダなのですか？」というものが多い。まず，はじめに，なぜ海外へそしてカナダという選択であったのかについて考察していく。

第1節　ジェンダー規範

第2章の事例のなかで語られているようにカナダに移住した女性の多くが，日本の企業社会における働きにくさを，カナダで就職することを決めた理由のひとつにあげている。日本の企業社会のなかで性差別的な待遇が

あることに限界を感じ，男女が平等に働けるといわれるカナダに可能性を求めて移住を選択している。

高い教育を受け一流企業に勤めても，お茶くみしかすることがないことに不満を感じ，また，男性と女性との昇進や給与の格差などについても多く語られた。新日鉄の東京本社勤務が長かったHさん，男性の3倍～5倍やって初めて認められる状況だったこと，男女格差があまりにも激しいことに会社へ直訴したという（退職後にカナダ移住を実行）。歯科医のSさんは日本の大学医局のなかで「男社会序列制」に失望。既に7年勤務し歯科医としてのキャリアも積みあげているところだったが，海外にでることを決意しカナダの医師資格を取得するために渡航（1997年）した。1年かけてカナダでの医師資格取得に必要な4つの試験をパスさせ，現在バンクーバーで開業している。

日本社会における「会社主義」や「男性中心主義」による軋轢のなかで，自己の位置づけが不安定であり，「先行きがみえてこない」という認識がある。とくに女性の場合，企業内でのキャリア・アップやこれに伴う生活設計がみえてこないというだけではなく，さらに加えて，女性の人生において重要な分岐点とされている結婚規範への違和感があることも大きな要因としてあげられる。とくに20代後半からまわりからの結婚に対するプレッシャーを意識し，30歳を過ぎてから独身でいることに生きにくさを感じてきたという女性は多い。

また，個人がおかれた世代的要因（マクロレベルでの経済，政治，環境などの諸条件の相違）も，少なからず，ミクロレベルでの個人や家族の意志決定に作用を及ぼしている。また，そのような状況のなかで，個人がどのように主体的に戦略的に選択を行っていくのかについては，今後，さらに詳細に事例を辿らなければならない課題である。

第2節　移民の条件：カナダの移民政策と永住権取得について

今日の労働移民は絶対的な労働力不足によるものではなく，分業に基づ

く部門的労働力不足にある。失業率の高い地域においても，特定の部門は移民労働力に依存せざるを得ない。そこで美容師，家政婦，看護師，エンターテイメントなどの部門は女性労働力に依存する。カナダの移民政策のなかで，移民選抜に課せられるポイントシステムは，カナダの人口と労働市場に見合うようになっている。カナダ社会のなかで不足する労働力部門を優先に選抜されるわけである(9)。このようにグローグローバリゼーションと関連して女性移民の位置づけの転換が生じている。

また，カナダでは3年就業することで永住権(10)が取得可能（移民許可）になる。そのため，滞在期間が3～4年以上に及ぶ者の多くは，永住権取得（移民許可）をひとつの目標にしている。永住権を取得すれば，転職や企業のための法的な障壁がなくなることに積極的な意味を見出すものは多い。しかし，カナダで永住権を取得することが，日本を永久に離れることを意味するわけではなく，日本国籍によって保証される日本での居住権にあわせて，もう1つの場所を手に入れるという感覚で語られる。アメリカへの移住を希望していたがカナダへ変更したという女性は多く，その理由として永住権の取得と医療費に関することが述べられた。アメリカはカナダに比べて独身女性の長期滞在が難しいこと，そして高い医療費の問題があることが語られる。カナダ移住という選択にはもうひとつの選択肢としてのアメリカと比較して移住しやすいこと，生活しやすいこと等が要因となっていることがわかる。

第3節　家族としての移動：結婚を契機として（配偶者として）

家族としての移動や移住のなかで最も多いのは，結婚を契機として結婚相手との関係で移住を選択するケースである。いわゆる外国籍男性との「国際結婚」と呼ばれるパターンや，カナダ在住の日本人や日系人との結婚である。その他の家族移動では退職移民・退職移住がある。退職移住の場合は「その国で労働ができないこと」が条件となる。つまり，「働かなくとも暮らしていける人」に限定しており，総資産額と年金や利子所得に

よる年間の収入が一定額をクリアしていなければならない。この制度は現在では既に廃止されているが，この制度で移住しカナダで生活している夫婦は多い。そして，最近見られるようになったのは「子どもの教育のため」の移住である。

まず，最初に，①結婚による移住から考察していく。インフォーマントの女性93名中，国際結婚は32名（34%）である。彼らのうちの多くが日本で出会い，数年日本で結婚生活を送った経験をもつが，仕事やこれからの生活を考えてカナダへ移動したケースが多い。夫の出身国は多様であるがカナダが最も多く，イギリス，アメリカ等がそれに続く。留学していたカナダの学校で，同様にカナダへ留学してきた夫と出会ったケースも多くみられる。これまで大変だったことを挙げてもらうと，言葉の壁であることが多く，英語で十分なコミュニケーションをとれないと感じることや，それに付随した問題で社会的な交際が思うようでないこと，具体的には夫の親族や子どもを通した学校関係の問題があげられた。人種差別の問題にも直面してきている。

退職移民による移動では，退職する1，2年前に申請し，退職後退職金を持っての移住となる。老後の生活場所がカナダに変わったけれども，多くが社交関係も日本人社会に限定し，さらに退職移民同士のグループで交流していることが多い。カナダに旅行に来たことがあったり，カナダに家族がいたりする例が多い。

③子どもの留学。子どもがカナダに留学して，留学後もカナダに住むことを希望したり，子どもに会いに来たところカナダが気にいり，引退後にカナダに住むことを考えて移住権を取得する例である。(第2章　事例14)。また，カナダの教育制度が日本よりも優れているとして子どもをカナダに留学させるために，家族全員で移住したケースもある。中学・高校生以上の子どもを持つ人たちになるので，平均40代後半～50代の層である。

第４節　自由なライフスタイルを求めて

カナダへの観光旅行がカナダ移住をするきっかけであったという対象者は多い。観光から留学へつながったケースや，はじめて観光で来た時にカナダが大変気に入ったため「また住むために必ずやってくる」と決意したと語ってくれたケースもある。「すばらしい自然」のなかで生活できることは，即，「すばらしい生活」となるのではないか，という期待であったようだ。

カナダの生活文化に愛着を抱いている女性も多い。第２章の事例７のHさんは，カナダのよさは「型にはまらない生き方ができるところ」であり，個人の生き方が尊重される風土は，たとえあるグループでうまくやれなかったとしても，常に別の可能性があると指摘している。同様な視点で「世間」を気にしないで生活できることに解放感を感じる，という女性も多い。

国際結婚し，ヘアドレッサーとしてカナダで35年の生活を積んだHさんは，「日本の昔の女性は風習や世間体にがんじがらめにされ，自分というものを持てなかつた。私はそれが嫌でした。ところが，今の日本の女性は自分を持てる状況なのに，自分というものを持っていない。流行の服を着て，お化粧も髪型もみな同じ。ブランドネーム入りの洋服を着るのも，自分に自信がないからだと思います。人が自分をどう見るか，どう思うか，どうこう言われるのが嫌だから・・というのが見えます。カナダの社会が日本と違うのは＜自分の意思を殺し，世間の体裁のために生きる＞必要がないことです。そういった点で日本よりこの国の方が楽だし，自分を生かせると思います」と語る。自由なライフスタイルが選択できるかどうかが，重要な要因となっていることがわかる。

第５節　移住の世代的特色

①移住した年代：1960年～1980年代＜海外へのあこがれから＞

この世代女性の学歴は比較的に高く，日本で大学卒の学歴を有し，留学生として海外へでた経験をもつ者も多い。この時代，留学生として日本か

ら外国に行くケースを考えると，比較的裕福な層という背景を持つ。現在語学力を活かして教育，翻訳サービス，図書館司書などの専門家になっている。社会に対する意識も高い。日本にいる家族や親族との関係では，国際結婚ということで，その当時の時代背景から，まわりから反対されて結婚・渡航したケースが多い。そのため，親に対して罪の意識を感じている場合がある。日本にいたなら娘である自分が親の面倒を見る立場なのに，その役割を担っていないこと。結婚したこと，海外にいること，さらにそのことで親不孝を重ねていると感じている女性がこの世代である。状況によっては，１ケ月くらい日本に戻り親の介護に当たってくるということを重ねている女性も多い。

②ワーキングホリデー制度世代：1990年代以降

この時代，日本からのカナダ移住者の特色としては，多くがワーキングホリデー・ビザで渡航していることである。1986年に制度ができたことで，多くが英語を勉強したり仕事をしたりすることを目的として，半年から１年の滞在となっている。これらの女性は仕事として，日本人向けのサービス業や小売業に集中している。語学力がないうちは仕事もなく，あったとしても日本語での仕事に限られるためである。大学在学中に渡航するケースもみられ平均的年齢や学歴は1960年代より低下している。ワーキングホリデー・ビザから，努力して就労ビザへ切り替えるケースもある。

③子ども時代の生活環境

この世代で，帰国子女であったため海外志向が強かったというケースがある。親の仕事関係で体験した子ども時代の海外生活が，海外で生活したいと考えるに至った重要な理由として挙げられる。カナダが選択された理由としては，「その土地が自分の不安を肯定し解放してくれる場であると感じられている」と語る。

おわりに

現代社会においては，テクノロジーの発達や政治経済のグローバル化が進み，生まれた土地を離れて移動していくことの意味が大きく変容していると考えられる。カナダで長期に渡って生活している日本人女性の事例もまた例外ではない。移動が拡大することによって，出身社会における既存のジェンダー秩序が変容を迫られたり，あるいは移動した先で，移住者の家族とコミュニティ出身社会におけるジェンダー秩序とは異なる関係性を新たにつくり出していくという過程もある。受け入れ側社会にとって，それは社会の多文化化の過程と重なっている。しかし，それは移民が出身文化をそのまま堅持することを意味するものでもない。

バンクーバーに代表されるカナダ社会やカナダで生活する多くの日系女性移住者に接して感じたことは，むしろ文化の相互作用のなかで，普段に新しい文化を創造し，ネットワークを築き上げている。そうしたネットワークのなかで今日女性が中心的役割を占める傾向にある。頻繁な通信や訪問によって絆を維持し，さらなるネットワークを構築している彼女らの役割は大きい。これらを受け入れる社会の能力を高めていくことが，今日，私たちの課題となっているのではないだろうか。

今後の課題として，日本からカナダ社会への国際移動をグローバルな文脈の中に位置づけ，他の地域における国際移動と比較して検討していくことが必要となるだろう。

謝　辞

本研究を遂行するうえで多くの方々と諸機関からご援助を賜りました。

まず，はじめに，調査研究の意図を理解され，貴重な時間を割いて資料を提供し話を聞かせて頂いたバンクーバー在住の皆様に御礼申し上げます。次に，日本カナダ大使館，バンクーバー日本国領事館，ＵＢＣ図書館アジアセンターのご協力に感謝申し上げます。

（注）本論文は，平成13年度から平成15年度の３カ年にわたって交付を受けた文部科学省科学研究費補助金「基盤研究（C）（２），研究課題番号：13610361，研究課題：カナダ日系女性移住者の文化変容に関する文化人類学的研究」の研究成果としての報告書[11]の一部をとりまとめ，加筆訂正したものである。

注

（１）ロッキー青木氏はアメリカにおいて「ベニハナ」というレストランを起業して億万長者となった日本人経営者として有名である。彼は今から40年前のニューヨークで，皿洗いなどで貯めた資金を基に，一軒の鉄板焼き日本料理店を開業した。そして現在，そのレストラン「ベニハナ」は世界に100を超える店を持つ大チェーンに発展している。その起業精神を著した本はベストセラーになり，また著名人との交流も深く，「アメリカンドリームを掴んだ男」「アメリカで最も有名な日本人」と称される。

（２）アメリカ軍兵士をさす言葉。ここでは，特に第２次大戦後の駐留期間に，日本に滞在していた米陸軍兵士を指している。

（３）長崎県佐世保市地域の方言で「何をしているのだろうか」という意味表現。

（４）上記と同様に佐世保市地域方言で「あなたは，いつまで仕事をしなければならないの。カナダの旦那さんは（あなたに）お金をくれないの」という意味表現。

（５）SFU（Simon Fraser University）は，カナダで最高の総合大学として過去５回Maclean's の年間番付にランクされ，the publication's national evaluations のトップまたはその近辺にいつも位置している。キャンパスは，バンクーバーの隣市バーナビー本校，バンクーバーダウンタウン，バーナビーの隣市サレーにあり，合計３つのキャンパスから構成されている。

（６）国宝ローズとは，アメリカのカリフォルニア米の一品種である。100種以上も銘柄のあるカリフォルニア米の中でも品質がよく，味のいい米としてアメリカではナンバーワンの評価を受けている中粒種である。

（７）UBC（University of British Columbia.）カナダのブリティッシュ・コロンビア州にある総合大学。カナダの雑誌 Maclean's が選ぶランキングで，新入生の高校平均成績，大学のクラスサイズ，大学教授の博士号保持率，大学予算，図書館の蔵書数や利便性，地域の評価など様々な視点で順位が決定され，毎年ベスト５内にランク

されている評価の高い大学である。

（8）竹沢泰子「グローバリゼーションと移民研究」『移民研究年報』第5号，6頁。

（9）筆者のインフォーマントのなかで，移民許可された当初の職業にずっと従事しているという人は少なかった。1970年代にカナダへ移住した時の職業で人数の割合が高かったのは，男性が自動車整備工，女性は美容師であった。この二つの職業は比較的離職率が少なく，現在でも継続して従事している割合が高い。

（10）永住権取得後は次のような権利が認められ，義務も発生する。①出入国に関して制限がない。②就労の自由が認められ，転職も自由である。③医療保険，年金等の社会保証制度が受けられる。④日本国籍を保持したまま，永住ビザを所持できる。⑤年間の半分以上をその国に居住しなければならない。⑥その国の税制に従ったすべての納税義務が発生する。

（11）平成16年3月発行の研究成果報告書

【引用・参考文献】

Appadurai, Arjun

1997 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization.* Minneapolis and London: University of Minneapolis Press.

伊藤るり

2004「国際移動とジェンダーの再編」原ひろ子編『比較文化研究－ジェンダーの視点から』　放送大学教育振興会 pp.229－252

岩崎信彦他4名編

2003『海外における日本人，日本のなかの外国人』昭和堂

上野千鶴子

1996「平成状況下の女と男」『月刊みんぱく』6月号：pp.2－7

コバヤシ，オードリー

2003「ジェンダー問題としての移民－日本人女性のカナダ移住」岩崎信彦他4名編『海外における日本人，日本のなかの外国人』昭和堂pp.224－238.

酒井千絵

2003「香港における日本人女性の自発的な長期滞在－長期滞在者からみた「香港　就峨ブーム」岩崎信彦他4名編『海外における日本人，日本のなかの外国人』昭和堂pp.239－253.

外務省『海外在留邦人調査統計（各年度版）』

竹沢泰子

1998「グローバリゼーションと移民研究」『移民研究年報』第5号pp.66-81

山下晋司

2002「グローバル化のなかの性／ジェンダー　－国境を越える女性たち－」『文化人類学研究－環太平洋地域文化のダイナミズム』放送大学教育振興会　pp.209－222

山下晋司

2002「移動のトランスナショナリズムの人類学（1)」『文化人類学研究－環太平洋地域文化のダイナミズム』pp.67－80

拙著

2000『カナダ日系社会の文化変容－海を渡った日本の村三世代の変遷』御茶ノ水書房